発表 No.研１　　**研究発表**

複言語環境で育つ就学前幼児と保護者を地域で支えるために必要なこと
―プレスクール事業の実施・改善に向けた文献調査から―

川田 麻記　（桜美林大学）

１．研究の背景と目的

複言語環境で育つ子どもが直面する問題の一つに、就学前に適切な支援が受けられるかどうかで生じる教育格差があり、その対策としてプレスクール事業の重要性が指摘されている(内田、2021)。しかし、就学後の学校生活・学校文化への子どもたちの「適応」の在り方をどのように捉えるかで、プレスクールは同化主義的な支援に陥りやすいという問題を抱えている。そのため、受入側は、子どもに同化を強いてしまう可能性があるということを意識に留め、どのような支援が子どもたちの学びに向き合う力を育てるかを考え、その実践を批判的に問い直していくことが重要だとされる(内田、2021)。本研究では、これらの視点を踏まえ、地域で行われるプレスクールをより良い実践・運営につなげるために必要なことは何かを探ることを目的とし、関連する実践・研究の動向を文献調査によって把握し、今後求められる実践・研究を模索する。

２．文献調査の分析対象の選定と分析方法

文献の収集は、まず子どもの日本語教育に関わる実践・研究が豊富に掲載されている『日本語教育』『異文化間教育』『子どもの日本語教育研究』を J-Stage で選択し、「プレスクール／就学前」と「外国／幼児／子ども／地域／日本語」のキーワードを組み合わせて検索し 30 件を得た。次に CiNii を利用し、紀要や論集、学会予稿集も含めて同じキーワードで検索し、上記と重複しない日本語の文献 17 件を含め、計 47 件を得た。検索期間は 2024 年 1 月 3～5 日である。

分析対象は、まず実践・研究の対象が母語や第二言語を問わず就学前幼児であるもので、日本語を含むことばの学びに言及するものを選定した。また就学前幼児の支援に関わる大人の役割や教育観に言及するものも含めた。そのため、小学生以上が対象のもの(8 件)や日本語モノリンガルの就学前幼児が対象のもの(1 件) の計 9 件を除き、計 38 件を分析対象とした。分析方法としては、まず実践・研究の対象(就学前幼児・周囲の大人・支援の在り方等)、目的(就学前幼児の数や語彙習得等の実態把握・就学前支援の報告・課題整理等)、場所(国内・海外)で分類した。また同化主義的な支援に陥りがちな就学前の支援活動に対して、支援者はどのような意識をもち、どのような対策や活動が行われているのか、そして何が課題となっているのかを中心に考察した。

３．分析・考察と課題

表１は、幼児の就学前支援に関わる文献を２で示した方法で大きく５つに分類したものである。

表 1 就学前幼児に関わる文献の分類と件数（文献情報はページ制限のため本稿では省略する）

分類		件数	
① 就学前幼児を直接的に対象とした調査・研究・実践	就学前幼児を主な対象とする支援の実践報告	8	14
	就学前幼児の数や語彙習得等の実態把握	6	
② 就学前幼児に関わる大人（保護者・保育士・支援者・支援団体等）が対象の研究		8	
③ 就学前幼児に関する文献・実践のレビューに基づく課題整理・支援のあり方		6	
④ 異なる専門領域から読み解く実践・研究へのまなざしと教育観		3	
⑤ 就学前幼児を対象とした海外での支援の事例からの示唆		7	

①からは就学前幼児の言語習得の特徴、幼児に適したシラバス選定、幼児の主体的な学びと成

長を重視した取組、②は保護者・保育者の困り感とその支援方法、支援体制のあり方、保育者・支援者に求められる視点と変容、①⑤は各国・地域の実態と支援の特徴・課題、③④は支援に有用なアプローチや対象を捉える多角的視点が示された。

3.1　プレスクール等の就学前支援における同化主義的支援への批判的視点

本節では、同化主義的支援に対する批判的視点の有無に着目する。まず①就学前幼児への支援の実践報告については、8 件全てに対象幼児の母語・母文化への配慮に関する言及が見られたが、同化主義的な支援への批判的記述が具体的にみられたものは８件中１件のみであった。特に 2009 年に愛知県のプレスクール・マニュアル（以下、マニュアル）が公開される前の実践については、幼児の日本語学習に特化した集中的な実践や日本語の語彙・表現の学習が中心の実践が見られた。マニュアル公開後の実践は幼児の主体的な学びや母語教育・親子の関わりを重視した取組の効果に言及される傾向があり、過去に行っていた語彙・表現重視の支援からの脱却を試みた実践や子どもの持つ複数の言語資源を活用した実践も見られた。一方、②の地域の支援者・支援団体を対象とする研究によると、特に外国人散在地域ではその支援は依然としてボランティアに依存する傾向が強く、支援体制の脆弱性が報告されていた。プレスクールについても「先取りして学ぶ必要はない」という認識からその重要性が理解されないといった課題があることも指摘されていた。

3.2 「連携」に関する課題とより良いプレスクールのために今後求められる実践・研究

①～⑤の文献に跨って指摘される点に「連携」に関する課題がある。外国人家庭が抱える課題については、多くの文献で個別問題として矮小化せず、地域社会で支える必要性が主張され、特に、行政・地域団体・幼保園・学校・保護者・専門家・大学等との連携の重要性が指摘されている。その中で、関係者間での認識のずれや齟齬、情報共有の不徹底もしばしば指摘されているが、こうした問題に対する解決策や、持続可能な連携体制の構築にいかにアプローチするかを具体的に論じた文献は少ない。今回得られた文献の中では、②の井濃内・井出(2020)が保護者と保育者の相互作用に研究者が介入し、「ことばの壁」を解きほぐすことで信頼関係の構築を促す可能性を指摘しており、こうした多様な立場の人々による「越境的な対話」（香川、2015)の考察が今後より重要になると考える。またより良い支援体制の構築を考える上では、就学前幼児の学びを支える異なる立場の関係者が、支援の目的と併せて教育格差や同化主義への批判的まなざしを共有しているか、連携が一部の関係者に極端な負担を強いるものになってないか、齟齬の原因は何か等を探る研究も意義があるだろう。プレスクール事業は近年徐々に広がりを見せているが、その実践の報告・研究の数はまだ十分とは言えない。質の良いプレスクール事業を目指すためにも今後は幼児の成長を中心に考える関係者間の互恵性に関わる実践・研究が求められると言える。

【引用文献】

愛知県（2009）「愛知県プレスクール・マニュアル」URL: https://www.pref.aichi.jp/soshiki/tabunka/0000028953.html （最終閲覧日 2024/2/23）

井濃内歩・井出里咲子(2020)「保育園と外国人保護者のコミュニケーション―ことばを問い、フィールドとかかわる言語人類学的実践研究―」『言語文化教育研究学会』第 18 巻、pp. 61-81.

内田千春(2021)「就学前教育・保育の視点から教育格差を考える―言語文化的に多様な子どもたちと接続期の支援―」『異文化間教育』54 号、pp. 19-31.

香川秀太(2015)「「越境的な対話と学び」とは何か―プロセス、実践方法、理論―」『越境する対話と学び―異質な人・組織・コミュニティをつなぐ―』香川秀太・青山征彦（編）第 2 章、pp. 35-64. 新曜社.